



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

春 — 別れから始まる出逢いの中で —

校長 白石 亨

ああっ、今、成長したなど感じる瞬間がある。

子どもたちの言動の中に、急に大人びた発言を耳にしたときや、他者に対する優しいしぐさが見られたときなど、大人っぽくなったなあと感じるときがある。だが、やはり一番、子どもたちの成長が感じとれるのは、節目節目に行われる儀式的な行事のときであろう。

先月、近隣の学区の小学校の卒業式にお邪魔した。

卒業生の6年生の所作がとても素晴らしかった。しっかりと来賓にお辞儀をし、登壇するとクルリと保護者席に向きを変え、呼名されると「はい!」と大きな声で力強く返事をした。その顔がとても晴れやかだった。学校・家庭・地域からの愛情をたっぷりとそそいでもらい、やさしく伸び伸びと育った小学校最上級生の顔があった。校長先生から卒業証書りりをもらう姿がとても凛々りりしかった。

親はいつまでも子どもだと思っているが、手を引いて一緒に列席した小学校1年生の入学式から6年間の歳月が流れ、子どもたちは大きく育っている。親の思い以上に確実に成長している。

式が終了し、校長先生が来賓席に来られ、来賓の退場を誘導していただいたが、その目元は少々赤味を帯びていた。キラリと光るものが・・・見えた。

桜の雨 思い出たどり ほほぬらす

この句はこの3月末、ある新聞の俳句コンクールに載っていた6年生の入選作である。

桜の花びらが散りゆく姿に涙を重ねたのであろうか。小学校を巣立つ切ない思いが込められているように思えた。そう、この時期の涙の意味はふたつある。長年慣れ親しんだ小学校にさよならをする淋しさと、晴れて中学校に進学していく誇らしさの喜びの涙である。この淋しさと喜びが入り混じった涙をいく度となく経験する中で、子どもたちはたくましく強く成長していくのだと思う。

そして62名の新入生を迎え入れる本校の在校生においても・・・。

それぞれが新2年生、新3年生に進級し、新しい教室、新しい級友、新しい担任の先生との出逢いが今までの自分の心をリセットしてくれる。さらに、新1年生の希望に満ちた瞳ひとみや初々しい表情を目にすることで、自分自身の入学時のことが蘇えってくる。中学生になったときの喜びや晴れやかな気持ち。新入生の姿に自分を重ね、初心を思い出させてくれる。心機一転、新たな学年、新たな学級で頑張っていこうとする気運が湧き上がってくるのにちがいない。

本校のサクラの花は、新入生のみならず、新たに着任した教職員も優しく出迎えてくれた。

今年度、本校の教職員は8名が入れ替わった。着任した教職員も見るもの聴くものすべてが新しい。この新鮮な感覚を大切にしてもらいたい。そして、新たな息吹を清新二中にそそぎ込んでもらいたい。春先の新鮮な息吹が、人をそれぞれにひとまわり成長させ、組織としても一段大きく飛躍できる契機になってくる。生徒243名、教職員36名の清新二中の令和5年度が始まっていく。生徒同様に初心を忘れずに、清新第二中学校の教育活動が一層充実できるように努めたい。